

## エッセイ 台湾研究を始めるということ

### 実地調査から始まった原住民族の研究

笠原 政治

私は1977年に初めて台湾を訪れ、台東県の平地にあるブユマ（卑南族）の村で資料収集のための調査を行った。また、1984年には入山許可証を交付されて待望の山地調査ができることになったので、今度は屏東県のルカイ（魯凱族）居住地において同様の収集活動に取り組んだ。どちらの場合も現地滞在了期間は2ヵ月ほどである。私の原住民族研究はそれらの調査体験から始まったといつてよい。

文化人類学の研究者は、ふつう自分が研究の基盤にする民族や地域を決めるように求められる。その民族・地域の実地調査に基づいて論文や資料報告を書き、それをもって専門的研究の第一歩と見なされることも多い。私の場合は台湾の原住民族を基盤にすると決めたのであるが、上述の調査を始めた段階ではこの人びとに対する関心がこれほど長く持続するとは考えてもいなかった。

よく知られている通り、台湾の原住民族をめぐる社会状況は1980年代の半ばから90年代にかけて大きく移り変わった。台湾原住民族権利促進会の運動をはじめとして原住民族意識の高揚に伴うさまざまな動きが現れ、1987年に戒厳令が解除されてからはそれらの影響が社会の広い範囲に及んでいった。私が実地調査の目的で台湾通いを始めたのはそのような変化が起こる前の時期である。当然のことながら原住民、原住民族という名称はまだなく、外来の日本人である私がこの人びとを「山地同胞」と呼ぶわけにもいかない。いま振り返ると違和感を覚えるのだが、当時はやむをえず「高砂族」という旧名称を使うこともあった。

その頃に原住民族の村で見られた光景の1例として、自分でも気に入っている古い写真を紹介してみよう。これは、1977年の夏に台東県東河郷のアミ（阿美族）の村へ知人を訪ねたときに撮影したものである。画像の右側に村の小さな教会が見える。教会の前で細い棒を手にした少年がアヒルの群れを追っている。そしてその足元に目を向けると、少年は裸足であることが分かる——。いまではなかなか見かけることがなくなったような光景であるにちがいない。

村々では、台湾の経済成長とともに若年層を中心にした人口流出と住民全体の高齢化が確実に進行していた。多少の時間差は



あったにしても、その状態は日本の農山村で見られたような変化に近い。

村で暮らしている高齢者のなかには、直接の生活経験として、あるいは父母・祖父母世代からの口伝を通して、自民族の古い慣習や故事来歴に通じている人物がどこでも何名か健在であった。私はそれらの古老たちをインフォーマント（話者）にして聴き取りの調査を進め、得られた資料に現状の変化や外部社会との関係などについての考察を加えて調査結果を発表した。当時の調査研究は概ねそういう形をとっていた。現在ならばサルベージ人類学（消え去りつつある文化の断片を拾い上げる研究）という批判を免れないだろうが、1980年前後にはそのサルベージという言葉すら知られていなかったのである。

戒厳令下の現地事情についても1つだけ自分の小さな体験を記しておこう。ふつう村に滞在する場合には、その村を管轄する警察署にパスポートを提示して宿泊場所と期間を登記しておけばさして面倒な問題は起こらなかった。要注意なのは居場所を移動するときである。ある日、東部の小さな町に住むプユマ（卑南族）の家族を訪ねた私は、歓待されるままに酩酊してしまい、警察で登記するのをすっかり忘れていた。「隠れてください」というご主人の低い声でハッと目を覚まし、慌てて寝台の下にもぐり込んだのは明け方のことである。住宅の入口でしばらくご主人と問答をくり返した警官は、室内には踏み込むことなく引き上げていった。後で聞いたところでは、日本人を無断で泊めていると近所の住民が当局に通報したらしいという。結局そのときは夜が明けてから地元の警察署へ出頭して事無きを得たが、後に訪れた山地の村々でも警察とは何度かこれと似た「付き合い」が続くことになった。

戒厳令の解除後に原住民族をめぐる台湾の社会状況は大きく移り変わり、その変化に応じて研究のあり方もさまざまな点で刷新された。上に述べた実地調査の体験がどんどんセピア色に変色していくように感じられたほどである。

日本人研究者の間で日本統治時代の原住民族とその研究への関心が高まってきたのはその頃からだったと思われる。日本の原住民族研究ではそれまでも戦前の資料がよく活用されていたが、新たに現れてきた研究は、原住民族統治の分析、当時の研究を担った人物とその著作に関する考察、埋もれていた資料の発掘など、内容が以前よりずっと多彩になった。第二次大戦後すでに長い時間が過ぎ、日本統治時代を実際に生きた世代の人たちが遡減していく時期にその種の研究が増えてきたといつてよい。そして私の場合も、研究の重心は現在の村々から日本が台湾を統治した時代へと次第に移っていったのである。

昨年、19世紀終盤の伊能嘉矩から1930年代の台北帝国大学土俗人種学研究室まで、日本統治時代の原住民族研究史を辿った論文集を台湾で出版していただいた（『日治時代台湾原住民族研究史』、陳文玲訳、臺大出版中心、2020年）。実地調査に基づく台湾原住民族の研究が100年以上も前から行われてきたことを示したのである。第二次大戦後の研究史にはまだ手をつけていない。日本人による戦後の研究については日本で跡付けなければならないと思うのだが、そうであるならば、一時期からその片隅に加わってきた私にふさわしいのは自分の体験を語るインフォーマントの役回りなのかもしれない。

(2021年4月)